
ほのかちゃんとみつばちと桜の木

ほしの すばる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほのかちゃんとみつばちと桜の木

【Nコード】

N7145E

【作者名】

ほしの すばる

【あらすじ】

はちみつが大好きなほのかちゃんは、おじいちゃんの所にはちみつをもらいに行きます。そこでみつばちのチビとお友達になったほのかちゃんは、チビの案内で桜の木に会いに行くことになりました。

ほのかちゃんはママが作ってくれるホットケーキとおじいさんの
はちみつがだいすきです。

今日も朝食にママがホットケーキを作ってくれました。

ほのかちゃんは太よろこび。

「いただきまーす」

ほのかちゃんはホットケーキを食べようとして、あることに気付
きました。

ホットケーキの上に、はちみつがかかっていなかったのです。

「ママ、はちみつは？」

ほのかちゃんがママにきいてみると。

「ごめんね。はちみつ、なくなっちゃったの」

と、ママはあやまります。

「でも、はちみつがなくても、ママのホットケーキはおいしいわよ」
「いやいや。ほのか、はちみつがないとホットケーキ食べたくない」

ほのかちゃんのわがままに、ママは困ってしまいました。

そこで、ママは考えました。

「そんなにはちみつがほしいのなら、おじいさんのところに行って、
はちみつをもらって」

きてちょうだい」

はちみつがどうしてもほしいほのかちゃん、ママの言つとおり、おじいさんのところ

へはちみつをもらいに行くことにしました。

おじいさんの家は、ほのかちゃんの家の近くの丘の上にありました。

「おじいちゃん、おはよう！」

ほのかちゃんは元気よく、おじいさんにあいさつします。

「おはよう、ほのか」

おじいさんはえがおで、ほのかちゃんをむかえてくれます。

おじいさんはパンにたっぷりのはちみつをかけて食べていました。

「今日はどうしたんだい？」

「あのねあのね、はちみつがなくなちゃったの。ほのかね、ホットケーキだいすきだけど、

おじいちゃんのはちみつがないと食べたくないの。だから早くはちみつちょうだい」

せっかちなほのかちゃんは、まだパンを食べているおじいさんを急がせます。

だけど、おじいさんはほっほっほと笑いながらパンを食べていま

す。

「早く早く!」

ほのかちゃんは、足をバタバタさせます。

「いそがんでも、ホットケーキはにげはせんよ」

おじいさんはパンを食べおえると、ゆっくりと立ち上がります。

「今からみつをあつめるから、ここでまってなさい」

「ほのかもおてつだいする」

早くホットケーキが食べたいほのかちゃんは、おじいさんのあとをついていきます。

おじいさんはたくさんある巣箱の中から、巣枠を取り出します。
ほのかちゃんは、おじいさんのしごとをじっと見ていました。

「ねえ、おじいちゃん。みつばち、おこらない?」

「みつばちはたらき者でおとなしいからおこったりはしないよ」
「ふーん」

ほのかちゃんは巣箱をのぞきこみました。
すると、巣箱から一匹のみつばちがでてきました。

「わっ」

びっくりしたほのかちゃんは、おじさんのうしろにかくれます。

「だいじょうぶだよ。ほら、ほのか」

ほのかちゃんは、おそろおそろおじいさんのうしろから顔を出します。

みつばちのチビはぶんぶんと、ほのかちゃんの前を元気よくとびまわります。

「はじめまして、ほのかちゃん」

最初はこわがっていたほのかちゃんでしたが、いつのまにかチビと仲良しになっていました。

ほのかちゃんは、レンゲ畑でチビとあそぶことにむちゅうになって、すっかりホットケ

ーキのことをわすれていました。

ほのかちゃんは、レンゲで花輪を作って、自分のあたまの上にのせます。

「ほのかね、おじいちゃんのはちみつがだいすきな。だって、すごくおいしいんだもん。」

ねえ、チビはいつもどこであんなおいしいはちみつをとってくるの？

ほのかちゃんがそうきくと、チビはとくいそうに答えます。

「本当はひみつなんだけど、ほのかちゃんはとくべつだからおしえてあげるよ。レンゲも」

おいしいけど、ぼくのおススメは桜なんだ」

「桜？」

「うん。じゃあ、これからほのかちゃんをあんないしてあげるよ」

ほのかちゃんは、チビにあんないされて桜をみにやってきました。

「わあ、きれい」

まんかいの桜をみたほのかちゃんは、とてもよろこびました。

ほのかちゃんがよろこんでくれて、チビもとてもうれしそうです。
チビは桜のはなびらへととんでいくと、みつをとってきました。

「はい、おいしいよ」

ほのかちゃんは、チビからみつをもらうと、ペロリとなめました。

「おいしくないよ」

「ほのかちゃんはまだこどもから、このおいしさがわからないんだ
よ」

「そんなことないもん！」

ほのかちゃんは、ぷうとほっぺとふくらませます。

そんなほのかちゃんをみて、チビはクスクスとわらいます。

ほのかちゃんは、ますますほっぺをふくらませます。

「ごめんごめん。本当はね、まだじゅくせいしてないから、あまく
ないんだよ」

「じゅくせい？」

「そうだよ。すぐ食べちゃうより少しじかんをおいて食べるほうがあまくなっておいしいんだよ」

「ふーん。じゃあ、ほのかがいつも食べているはちみつはじゅくせいしてるってことね」

ほのかちゃんは、チビからはちみつについていろんなことをおしえてもらいました。

はちみつのことにくわしくなって、ほのかちゃんはちょっとくいげでした。

と、そこに。

「えーんえーん」

どこからかだれかが泣いている声がきこえてきました。気になったほのかちゃんとチビは、耳をすましました。

「えーんえーん」

なんと、泣いていたのは背高のつばの桜の木だったのです。

「どうして泣いているの？」

ほのかちゃんは、桜の木にききます。

すると、桜の木は泣くのをやめて言いました。

「ぼくのあしもとをみてよ」

みると、空カンやお菓子のふくろや食べのこしのお弁当があ

りました。

ほかの桜の木の下にもゴミはたくさんちらかっていました。

「どうしてこんなにゴミがいっぱいあるの？」

「花見にやってきた人たちのゴミなんだ。みんながぼくたちをみてよろこんでくれるのは

うれしいけど、ゴミを片付けなくてそのまま帰ってしまうのが、ぼくはかなしいんだ」

そう言って、桜の木はまた「えーんえーん」と泣きだしてしまいました。

「このゴミ、ぼくたちで片付けようよ」

と、チビが言いだしました。

だけど、ほのかちゃんはいやだと言います。

「どうしてほのかがそんなことしなくちゃいけないの？」

「だって、桜の木が困ってるんだよ。助けてあげなきゃかわいそうじゃないか。このまま

だと桜の木は病気になって、おいしいみつがとれなくなってしまうんだよ」

おいしいはちみつが食べれなくなる。

それは、ほのかちゃんにとって大変なことでした。

「でも、いっぱいあるよ。こんなにたくさんゴミ、ほのかとチビだけでやるの？」

チビはとくいそうに、むねをどん！とたたきます。

「ぼくにまかせて」

そう言って、チビはどこかにとんでいきました。

ほのかちゃんは、ずっとチビをま待ちました。

だけど、チビはなかなかもどってきません。

ひとりのこされたほのかちゃんは、さみしくなつて桜の木といっしよに泣きだしてしまいました。

すると、どこからかぶーんぶーんをいう音がきこえてきたのです。たくさんのみつばちたちがこちらに向かつてとんできます。

「おそくなつてごめんね、ほのかちゃん。仲間をつれてきたからもうだいじょうぶだよ」

チビはほのかちゃんのあたまの上ののっかります。

「さあ、みんな。ゴミをひろつて、桜の木を助けよう」
「おー！」

チビのかけ声で、みつばちたちが桜の木の下のゴミをひろいはじめました。

「ほのかもがんばる」

ほのかちゃんは泣くのをやめて、チビたちといっしよにゴミをひろいます。

だけど、ゴミがたくさんありすぎて、なかなかなくなりません。そこに、大人たちが花見にやってきました。

「おじょうちゃん、なにをやってるんだい？」

ほのかちゃんたちに気付いた大人たちがきてきました。

「みんながゴミをちらかしたままにしてるから、桜の木が泣いてるの。だから、ゴミをひろってるの」

「そりゃ大変だ。みんなでひろってあげよう」

そう言って、大人たちもいっしょにゴミをひろい始めました。みんなで協力すると、あっという間にゴミはなくなりました。

「ありがとう、ありがとう」

桜の木は大よろこびで、ほのかちゃんたちにお礼を言いました。

「いいことをするときもちがいいね」

ほのかちゃんもうれしくなりました。
大人たちもみんなニコニコ顔をしています。

「桜の木さん、もう泣かないでね」

そう言って、ほのかちゃんは桜の木に手をふって、チビたちとおじいさんのところに帰りました。

「おかえり、ほのか」

おじいさんはえがおで、みんなをむかえてくれます。

「あのね、おじいちゃん。今日ほのかね、桜の木さんとおともだちになったの」

「そうかいそうかい。おともだちがたくさんできてよかったね」

「うん。チビたちもおともだちになれたし」

ほのかちゃんがそう言つと、チビたちはうれしそうにぶんぶんとほのかちゃんのまわりをとびます。

「はい、はちみつだよ」

「ありがとう」

ほのかちゃんはしばらくたてのはちみつを、おじいさんからもらいます。

「チビ、またあそびにくるからね」

ほのかちゃんはなんともなんともチビたちに手をふって、お家に帰りました。

お家に帰ったほのかちゃんは、今日あったできごとをママに話しました。

「よかったわね、ほのか」

ママはほのかちゃんのあたまをなでました。

ママにほめてもらえて、ほのかちゃんはとってもごきげんでした。

「はい、ホットケーキよ」

ママはごほうびにやきたてのホットケーキをだしてくれました。

もちろん、おじいさん

のはちみつがたっぷりにかけてあります。

「いただきます！」

ほのかちゃんは大きな口をあけて、ホットケーキを食べました。

「おいしい！」

はちみつがたっぷりかかったホットケーキが食べれて、とっても
しあわせなきもちに

なれたほのかちゃんでした。

おしまい

（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。
一言でも感想がいただけたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7145e/>

ほのかちゃんとみつばちと桜の木

2010年10月12日07時34分発行